

発達障害者の表情認知の問題とその軽減を目指す研究

「表情変化をどのように感じるか」について自閉症スペクトラム症の方と定型発達者の方での特徴を調べています

表情から感情を読みとることの難しさ

自閉症スペクトラム症（ASD）の方では、社会的コミュニケーションの障害や行動の反復・興味の偏りなどが障害の中核とされています。一方、ASDの方では、視覚・聴覚・触覚などの感覚が定型発達者とは異なるやり方で処理されることがわかってきました。このことが、定型発達者との間で生じるコミュニケーション障害の原因になっているのかもしれない。

コミュニケーションにとって、顔の表情から、相手の感情状態を推定することはとても大切です。ASDの方は、表情の読み取りが苦手といわれますが、どのような場面でこういった苦手が生じるのか、はっきりとは、わかっていません。

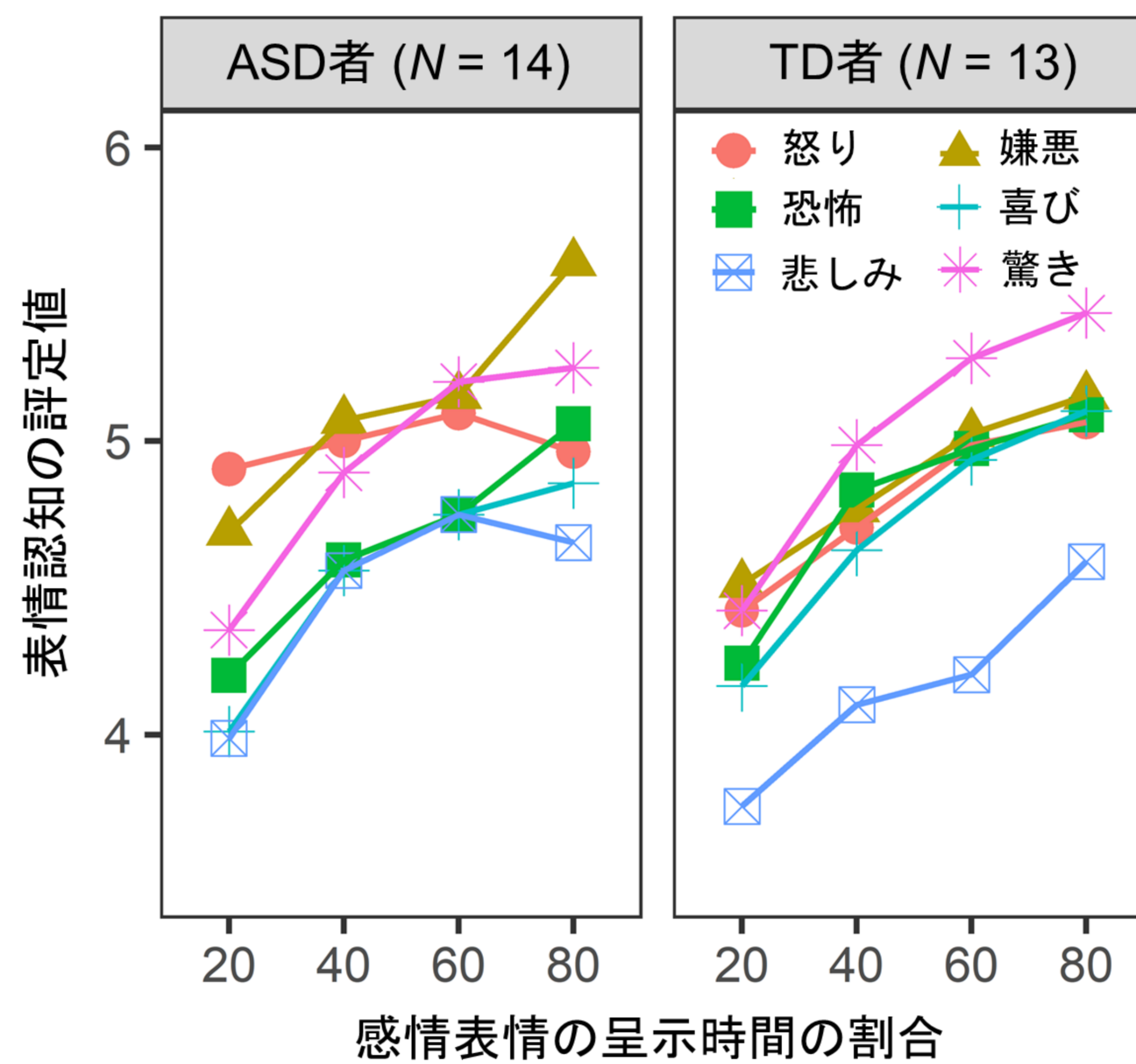
研究1：変化する表情から感情を読み取る際の特徴

顔の表情は時間とともに変化します。その中で、相手の感情がどのようになっているか推定することは、コミュニケーションに重要かもしれません。そこで、表情が変化する顔の画像に対して、その顔のどこをみていたかなど視線や瞳孔の大きさを計測しながら、どのような印象を受けたかについて研究しています。

これまでの実験で、定型発達者では、表情の表示された時間の長さに応じて感情の強さの見積もりができることが分かりました。一方、ASDの方では、怒り表情の度合いの見積もりが苦手である可能性などがわかってきました。



例えば・・・3秒間の中で「笑顔」と「真顔」の割合を変化させて表示し、印象を答えてもらう



定型発達者では表情のある顔の割合が高いほど強い印象と回答

ASD者は怒り表情について、比率に応じた判断が苦手かもしれない

原田・大山・和田（2021）
顔学会にて発表

研究2：コミュニケーションを円滑にする表情の表示方法



例えば・・・話し手と聞き手の間で表情の印象が等しくなるように調整

研究の成果を活かして、例えばオンライン会話中に、相手の表情がわかりやすくなるような表示方法を開発するなどを通じて、ASD者と定型発達者とのコミュニケーションが円滑になるような支援手法の開発を目指しています。



参加者募集に関する連絡先
→ dds_exp@rehab.go.jp
(左のQRコードからもお問い合わせいただけます)

和田 真 (脳機能系障害研究部・発達障害研究室長)
wada-makoto@rehab.go.jp

表情から感情を読み取る過程を調べて、
コミュニケーションの円滑化を目指します